



リサーチアドミニストレーション（RA）研究会」が企画し、これまでの研究会の活動で議論されてきた実務者が抱える問題や悩みを紹介し、その中で若手の“仕事のやりがい”にスポットを当て、産学連携・研究支援職を生かして活躍している若手人材や、現役の若手研究支援人材をパネリストとして、話題提供と対話が行なわれた。まず、研究会代表の馬場（岐阜大学）から、RA研究会の活動内容や課題を紹介した後、「研究→産学連携→研究支援」という自身のキャリアパスと研究支援に対するモチベーションについて話題提供し、以降3名の話題提供に続いた。原田（東京工業大学）は、「研究→産学連携→研究支援→人材育成」というキャリアパスを通して、役職による立場の違いはあれども相手を敬うことの大切さを論じた。片桐（アミンファーマ株式会社）は、「研究→産学連携→ベンチャー・研究支援・人材育成」というキャリアパスを通じて、地域や立場の枠を超えて率先して自らが成果の実用化と実装を担う熱い意志を論じた。最後に、URA歴3年目の設楽（東京海洋大学）が、「研究→産学連携・研究支援」というキャリアパスに加え、育児との両立も含めた業務への充実感と能動的な活動やそれに対する責任感について論じた。パネルディスカッションでは、4者に共通した「研究」と「支援」の両方の経験が、俯瞰的な視野や能動的かつ積極的な活動に生かされていることや、信頼を得るための不断の努力などを議論し、会場とのやり取りも含め、正に今後期待される未来など“ポジティブな”意識を共有化したセッションとなった。

---

大学発ベンチャー

座長 丹生晃隆／宮崎大学

6月15日(木) 第1日目 C会場 (11:30~12:30)

本セッションでは、計4件の発表が行われた。最初の発表として、河野（筑波大学）は、大学発ベンチャーを支える起業人材についての考察を行った。独自の研究の視点も交えながら、筑波大学における起業家教育の取り組みを報告した。次に、林（山口大学）は、平成28年10月に山口大学に開設された「志」イノベーション道場の取り組みを報告した。アイデアを創造し、これを「カタチ」にしていくための実践教育の「場」として興味深いものであり、この道場をハブとした地域のイノベーション人材育成システムの構築に繋がることが期待される。3つ目の発表として、山本一枝（株式会社ウェザーコック）は、北海道で最初の大学発ベンチャー企業として、今年で40周

年を迎えた同社について、創業から現在までの事業を振り返りながら、企業活動の継続に必要な要素について考察を行った。「常にイノベーションを心掛け、研究開発型企業となることで、新しいレールを敷いていくように未来が繋がっていく」、「大学や研究機関は世界に先立つ先端的な技術や高い完成度のある研究成果を、常に社会に提供できるように研鑽を続けていただきたい」という言葉にはとても重みがある。本セッションの最後の発表として、菊地（バイオマスリサーチ株式会社）は、2007年に帯広畜産大学発ベンチャーとして設立された同社について、北海道十勝地域における、地域循環型バイオマス利活用のモデルづくりに関わる報告を行った。十勝地区でバイオマス事業が普及してきた要因として、大学や公的研究機関、民間企業、研究施設によってバイオマス研究が行われてきたことで、地域づくりの初動「コンセンサス」が得られていたことを挙げる。十勝地区では、バイオガспラントの建設やメタンガス発電事業等を含めた、バイオガス事業の地場産業化を目指しており、今後のさらなる発展が期待される。

本セッションでは、大学発ベンチャーの人材を育成・輩出する機関である大学から2件の発表、そして、大学発ベンチャーの経営者から2件の発表が行われた。発表者が置かれている環境や文脈はそれぞれ異なるが、独自の視点や取り組みを基にした考察が行われた。質疑応答も活発に行われ、大学発ベンチャーに対する期待度の大きさを改めて感じさせるセッションであった。

-----

以上